



2016年2月発行

## 祝福のあるところ

彼らはイエスを伏し拝んだ後、大喜びでエルサレムに帰り、絶えず神殿の境内にいて、神をほめたたえていた。

(ルカによる福音書 23 章 53 節)

ルカによる福音書の最後に、イエス・キリストの昇天の出来事が書いてあります。十字架にかけられて死んだあと復活されたイエス様は、弟子たちや仲間たちを両手を上げて祝福され、そのお姿のまま天に上げられました。これはイエス様との最後の別れの時ですから、みんな涙ながらになってもおかしくはないのですが、みんな大喜びであったのはどうしてでしょうか。

それは主イエスからいただく祝福こそ、ほかの何にも変えがたい恵みであったからです。…ただし、皆さん、考えてみて下さい。ここにいる人たちはそもそもイエス様の祝福に値する人たちだったのでしょうか。イエス様がつまみ、十字架にかけられた時に見捨てて逃げてしまった情けない人たちなのですから、イエス様から「お前たちのことは知らん。もう二度と私の前に顔を見せるな」と言われてもおかしくはなかったのです。しかしイエス様は、意外にもご自分を裏切った者たちを祝福して、弟子として認めて下さいました。「あなたたちはそれで良いのです。あとは任せましたよ」との思いを表して下さった、そのことが、みんなの顔を輝かせたのです。

ここで祝福ということを考えてみましょう。私たちのまわりに祝福があふれているなら素晴らしいのですが、なかなかそのようには見えません。祝福の反対語は呪いです。祝福と関係のない世界では、自分たちのために別の人たちが大変な困難に追いやられ、死んだりすると、崇りを恐れてお祓いをするようなことが起こります。犯した罪に対する悔い改めも謝罪も、罪の赦しもないところでは、どこまでも恨みをはらそうとする人たちと、それに対し、どこまでも逃げて行こうとする人た

ちが出て来るものだからです。これは本来、互いに祝福すべき人と人との関係が崩れてしまったことの結果です。しかし、そういう人間たちに対し、主イエスはまことの祝福を与えて下さいました。神は決して、人間を呪ったり、崇りを起こすようなお方ではありません。人間は数え切れない罪と失敗を犯していますが、それにもかかわらず、そんな人間を祝福して下さいる神がおられるのです。

そこにいたのはみな、主イエスが十字架にかけられた時に何も出来ないで、後悔の念にさいなまれている人たちでした。神の前に、自分は無用の人間だと思っていたかもしれませんが、しかしイエス様から祝福されたことで、口々に喜びの声をあげました。これがそのまま神をほめたたえる言葉になったのです。たとえばこんなふうに。「神様がたたえられますように。私を神様の前に一人の人間として認めて頂き、有難うございます。私はもう自分を卑しめたりしません。どうか神様の御用のために私を用いて下さい」と。

これは、イエス様はまさに私たちに対しても祝福を与える方であることを教えているのです。祝福こそ私たちがイエス様を信じ、イエス様と共に生き始める時、私たちを包み、私たちの全ての歩みを根本から支える力であるのです。

皆さん、どうか両手を上げて祝福して下さいる主イエスのもとに集まりましょう。主のご支配のもとにいる時、私たちそれぞれがどれほど生きる世界が違っていても、ともに兄弟姉妹なのです。たとえどんなに苦しいところにいたとしても、神をほめたたえる言葉が口から出て来ます。そして信仰によって、苦しみは最も良い形で解決へと導かれるのです。主イエスの祝福のあるところ、教会の礼拝こそ、ここにいる私たちみんなの人生の中心でありますように。

(2016年1月10日の礼拝説教より)

牧師 井上 豊